

## 『老莊とその周辺』

吉元昭治著

東洋医学を専門にしている小生のよう  
な人間にとて、中国思想は必須の学問  
である。とりわけ儒教と道教の思想は、  
実際の臨床と関連している部分があり、  
どうしても知つておく必要がある。

そのうち儒教は、古代より医学と密接  
な関係を持ち、宋代の朱熹の理学（朱子  
学）の出現以後、中国伝統医学に影響を  
与え続け、金元時代に四大家を生み出し  
たあともこの医学の理論的な基盤となっ  
た。現代中医学もその影響下にあるとい  
つて過言ではない。

一方、道教は、その出発点である老子・  
莊子に基づきながら、さまざまに土  
俗的な思想を取り込んで、漢代には本草  
と結びつきを強め、六朝時代には陶弘景  
や葛洪など著明な医家の研究の対象とな

つた。神仙思想の導入もこの頃である。  
唐代になつてからは国家的な規模で信仰  
され、以後も中国歴代王朝と深い関係に  
あるのみならず、不老長寿、現世利益を  
目的とする宗教として中国人の生

## 現代中医学の基盤を解説

評 安井 廣迪



通の文章から明らかにし、更に、道教における生理学的基礎である「精」「氣」「神」について述べる。この視点は、漢方医には新鮮なものであろう。朝鮮の医祖のよ  
うな存在である許浚（ホジョン、1539-  
1615）が著した『東医宝鑑』の冒頭が「精」「氣」「神」に関するものであることは、道教を理解して初めて納得できるものである。欧米ではタオイズムとして同一視されている道家と道教の違いも、この学問を研究する上で極めて重要である。

本書の第四部と第五部は、古代の文字を追いかけ、そこから老莊の源に迫ろうという試みからなる。といつても、しかめつ面らしい議論が繰り広げられるわけではなく、順序を踏んで初学者でも易しくたどれるような論旨となつてているのは、ライフケースともいいうべき著者の道教研究の経験の賜物であろう。この周辺の領域に興味をお持ちの方や医学思想の研究家には格好の読み物であると思う。

吉元昭治著

吉元先生は、道教の源泉を探ると共に、  
これが中国伝統医学と極めて密接な関係  
にあることを、両者の重要な文献にある共

(たにぐち書店・4000円+税)